



思い出

横井政人

私は当時の住所 東京市淀橋区西大久保1 - 194 (現 東京都新宿区大久保1 - 194) で、昭和6年(1931年)4月6日に3姉弟の長男として生まれた。

横井家の初代は愛知の織田信長家臣 横井弾正長宗であった。信長の死後、九代目が江戸に出て、徳川家康の家臣になり、現新宿に住んだとある。江戸後期には戦後まで続く庭師(父)になり、大久保のツツジ園のひとつを開いたといわれる。横井家系図にある横井新吉の名が江戸嘉永地図 南豊島郡大久保に記録されている。この地図には「此辺古木キリシマの名所あり」とあるので、園芸地帯であったのであろう。今でも新宿区大久保ではつつじ祭りが行われている。

子ども時代

家は昭和戦争(太平洋戦争)の最後年、3月25日の大空襲でいっさい焼けてしまったが、系図だけは抱えて逃げた。家が焼失した後は、庭に地下壕を掘り数年暮らした。大久保から新宿の三越デパートまで家が全焼し、建物がなくなったので大久保から富士山がよく見え、今ではウソみたいな話になった。

このような異様な生活は、まだ子供の私には苦しみではなく楽しみであった。毎日の空襲で焼夷弾が火を噴き、空中ではB29爆撃機に体当たりする神風特攻隊の戦闘機を見たり、高射砲の弾丸がアメリカ飛行機の高さに届かないようすを見たり。何もない地下の生活をしながら、ほとんど住人がいなくなった焼け跡を歩いて焼け残った本や小道具などを見つけて、拾った本をはじからはじめて読み勉強になった。

こんな時にも現在の生活に役に立っていることがある。それは新大久保駅の北側に広大な陸軍の練兵場があり、小山、林、川が整備され、武蔵野の森になっていた。ここは戦争の終了近くからは子供の遊び場になり、毎日朝早くから虫取りに出かけた。今では見られないオニヤンマ、ギンヤンマなどのトンボ類、カブトムシ類、セミ類、タマムシなど、ほとんどの昆虫が舞い、また多種の植物が生え、自然そのものであった。今の都心は田舎であった。ただ食料はなく、私自身栄養失調になり、新宿駅の階段が上げられないほどになった。新宿駅ガード下には栄養失調で死んだ人がごろごろしていた時であったが、私は幸い生き延びた。

この理由はある。私は新大久保駅近くの戸山小学校に入学。ここの先生が、これからは農業が必要の時代にな

る、今後農業の勉強をするとよいと教室で話された。たまたま母の実家が北多摩の府中で、そこに都立農業実業学校があり、当時は小学校が終わるとすぐに入学できた。早速、新宿駅まで歩いて京王電車に乗り、1時間かかかって府中まで通った。しかし空襲がますます激しくなって、勉強どころではなく、生徒は農場や工場に通い、農・工業生産をやるようになってしまった。府中競馬場の馬場を鍬、スコップで掘り起こし、野菜、麦などを作ることもあった。しかし私は農家の友人が多くなったので米や野菜をもらえるようになり、おかげで栄養失調で死なずにすんだ。先生のご助言で農業方面に進んだのは、結局は私一人であった。

終戦半年前に木銃で練習開始。したがって実戦体験はなしで終わった。

学生時代

終戦は昭和20年、造園業だった父親は昭和22年に病死。したがって将来いろいろの仕事が選択できるようにと、アメリカ式633制に代わった新制大学2回目(昭和25年)に受験した。家が農家でないので、戦後の壊滅で暗い環境を直すためには花関係の仕事がよいと考え、千葉大学園芸学部を選んだ。

新制大学になった園芸学部は旧制専門学校の松戸での授業ではなく、千葉県稲毛で一般教養の授業が行われた。戦争のため教養的な授業を受けることが少なかったため、生物、化学、心理学など、また2年後期の専門的な教養科目で植物分類などを受けることができ、毎日が楽しかった。また英会話ESSにも参加し、楽しく覚えることもできた。体育関係の授業は嫌いであったが、友人と南北アルプスの高山や秩父などの山々を歩きまわった。

当時、園芸学部は花がいっぱいで専門の授業は楽しかった。穂坂八郎先生が教授、浅山英一先生が助教授で、花の勉強は最高であった。農場実習は2年生は週3日、3年後期は専門実習週1回ほど、両先生、故若佐吉純助手での栽培技術の指導は大変勉強になった。4年生になると卒論の実験が加わり、忙しくなった。

4年生後半は当時千葉大には大学院がなかったため、京都大修士課程に進もうと考え、ドイツ語などの受験勉強を行った。

千葉から京都に移動して、自然、歴史的環境の差に驚き、京都市の文化のすばらしさには感動した。大学のまわりにホテルが飛んでいるのには、東京から行った私に

は驚きであった。なにより京都市周囲の山、神社、寺院、庭園の古さ、美しさは関東では得られず、今でも忘れられない。

2年後の修士課程から博士課程に進もうとした3月末、思いがけないニュースが穂坂先生から伝えられた。それは故岩佐助手が坂田種苗に移動するので、後任にどうかということであった。塚本先生は東京生まれの君には、なによりのチャンスなので是非行きなさいということで、就職することにした。

母校に戻って

昭和31年(1956)千葉大学に戻ってからは、穂坂先生の球根促成温度処理研究に没頭した。チューリップが中心で、ユリ、スイセンなどの実験を行った。ただ私はチューリップの球根から出る白い液にかぶれる性で、指などの皮膚がくずれ血が出て、気持ちよく研究ができず苦しんだ。

チューリップの研究で私が忘れられないのは、ジベレリン処理である。当時ジベレリン研究が盛んで、穂坂先生も私に何か効果のある植物か処理法を見つけなさいと要求。その頃私は成果があがらず、ノイローゼ気味になって、温室の隅でジベ液をチューリップの葉に散布していた。その時、筒状に伸びてきた促成チューリップ新芽の中心部に気がつき、そこにジベ液をスポイトでなげなく1滴たらしてみた。1週間後、蕾が赤くなり、開花が促進されたのである。穂坂先生は早速学会で葉面散布では効果ないと発表。この処理法は私が穂坂先生と共同研究していなかったら発見できなかったと信じる。その時、園研職員として共同実験していた村井千里さんが、この処理法を埼玉農試移動後に発展させている。

穂坂先生退官後は、小杉清先生が香川大学から後任教授として着任、観賞植物の花芽分化の研究を続けられた。花芽の研究は植物材料を集めることが難しいこと、および研究後期に位相差電子顕微鏡が発明されたが、研究期間が足らなかったことが心残りとなった。

浅山先生は花色素に関心が強くいろいろ書かれていたが、研究法がまだ初期だったため完全な研究に発展しなかった。

私自身は生態学の群落研究を始めていたが、研究成果がわかりにくいという小杉先生のご意見で、観賞植物の花や葉の色彩、含有色素の研究に代え学位を取得し、現在も同様なテーマを継続している。色素研究法は私の定年後急速に発展し、精密な色素定性ができるようになったが、まだ研究法が容易でなく、また分析速度が遅いので将来の発展を待ちたい。

浅山先生の定年退職後、私や安藤先生が昇格、上田善弘助手が採用され、花卉研究室の人事が整い、研究も植物色素、育種、分類、さらにDNAまで、現代の研究に進行している。今園芸学部は1909年(明治42年)創立後、近く100周年を迎える、重大な分岐点にさしかかっている。

小杉先生着任後、松戸の農場にアルミ温室ができ、ま

た私の定年間近に広い柏農場を入手し、植物の収集や施設新設などで農場の発展もみられた。だが、私の定年後の現在、国立大学法人化による大学機構大改編で希望がある反面、昔の元気のない植物いっぱいのもも忘れたくない複雑な心境である。

わが植物生活

江戸時代から住んだ新宿区大久保も、自動車の増加による排気ガスで、娘2人が気管支を痛めるような環境になったため、思い切って郊外に移転することに決め、埼玉県川口市に移転した。35年前のことである。調整区域のため非農家は居住できなかった場所に、地元の卒業生柴道昭さんのご尽力で特別建築許可があり、園芸地帯に住めるようになった。これ以後の私の植物生活はまったく変わった。それまではただ見学する場所だった400年の歴史がある園芸地帯安行が生活の場所になり、私自身の収集・栽培はもちろん、植木、切花、鉢物生産、市場、売店などの情報、知識が直接、直ちに分かるようになった。さらに多くの生産者の生きた指導を受けられ、私にとって本当に貴重な栄養になっている。現在は当初より道路、住宅が増え、自然・緑が減ってきているが、市町村のご努力により最小限の自然破壊に抑えられている。

研究材料の収集から始まった植物探査は75歳を過ぎた現在、やや低調になってはいるが、まだ継続し、海外に出ることも多い。特に中南米には文部省補助金をいただき、長期滞在・探査したことを思い出す。アフリカ大陸だけはまだ行ってないが、各地で新しい貴重な植物を見ると興奮することもままある。収集範囲は、変わった花色植物、斑入り植物、カラーリーフプランツに絞っているが、現在、江戸時代に栽培されていた貴重な植物の保存に特に関心がある。

著書として誠文堂新光社から「原色斑入り植物写真集」(1978)や「カラーリーフプランツ」(1997)などを出版している。

会にもいろいろ参加して交流をはかっている。花葉会はもちろん、園芸文化協会、英国王立園芸協会日本支部、日本植木協会新樹種部会、NPO法人栽培植物分類名称研究所、観葉植物開発普及協会、変人会、日本植物園協会、園芸ニュースレター刊行会、日本ダリア会、日本アジサイ協会などがある。

定年間近に軽い狭心症にかかり、不整脈がよくできるようになって周囲の方々にご迷惑をおかけした。定年後、病院と薬を代えたところ不整脈がなくなり、現在に至っている。

過去を振り返ってみて、私個人の発展より、写真、写真機、複写機、コンピューター、インターネット、衛星、ナビゲーション、携帯電話、交通、医療、介護、薬品などなどのけた外れの発展に驚きで、これらを活用できる毎日を感謝している。

ただ最近では、今号の「花葉」にあるように、先輩、知人の訃報が多くなり、寂しさを感じる日々でもある。

(「花葉」15号(1996)業績など参照)